MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２４．１０．５　発行元
第 608 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

最近出た本の中から

最近出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。毎回本選びで苦労するのだが、今回は図書館でやっと借りることができた３～４月発行の本も取り上げることにした。「予約待ち」もなかなか大変。

南海トラフ地震への備え

今、この原稿を書いているのは８月中旬。一週間前に宮崎県沖でマグニチュード７．１の地震があり、「南海トラフ地震臨時情報」が出た。プレートの滑り面での地震であり、東海・東南海・南海地震の前触れになる可能性が考えられたからだ。３０年以内に起こる確率が７０％とか示されているものであり、準備と警戒を進めていかなければならないもの。本当に地震の予知は難しいし、地震の揺れ・津波の被害を予想することは現在の段階では不可能に近い。常に気を抜かずに備えておくしかない現状。

日本列島は４つのプレートの接する特殊な場所に位置しているので、南海トラフだけでなく、関東地方の首都直下型も考えられるし、東北北海道沖もありうる。今年の正月の能登半島地震のような日本海側も決して油断がならない。地震の活動期はまたしばらく続きそう。

台風５号が通過したばかりだが、自然災害はいつでも起こりうるものとして考えていくしかない。

内藤了『黒仏』

４月に講談社タイガから出た本。『警視庁異能処理班ミカヅチ』シリーズの五冊目。このシリーズは『藤堂比奈子』シリーズよりもずっとホラー色が強め。

今回は東京銀座で無差別殺傷事件が起こり、包丁で被害者の耳を切り落とす犯人が駆け付けた警察官に射殺される場面からスタートする。犯人の肩の近くに黒い仏像のようなものが憑りついている目撃情報から、ミカヅチに所属している霊視の役割りの安田怜が「黒仏」の謎を調査していく流れになる。ミカヅチのメンバー＋三婆ズの活躍は…。前作まではゴタゴタ感の混乱が気にかかったが、本作はスッキリした印象。わかりやすいストーリーの方がよい。

はやみねかおる『インド「もう一つの０」』

７月に講談社青い鳥文庫から出た本。『怪盗クイーン・シリーズ』の最新作になる。いつもながらの気まぐれで、飛行船トルバドゥールの中でクイーンはカレー作りに挑戦。思い通りの味が出ないので、インドの魔法の薬「アムリタ」を入れてみたいと考える。クイーンがインドに向かった情報はあっという間に拡散し…。

あとはお馴染みのメンバーが集合してくる。皇帝とヤウズ、国際刑事警察機構のヴォルフなどの探偵卿たち。それにインドのパシフィストのグループ。集まれば争いごとが生じ、ドタバタが開始される。戦っているような遊んでいるような…。目的の「アムリタ」も手に入ったような手に入らないような…。今回は比較的短い話なのであっさり巻末にたどり着いてしまう。薄味。

塔山郁　『薬なければ病なし』

７月に宝島社文庫から出た本。『薬剤師・毒島花織の名推理シリーズ』の７冊目になる。６編収録の短編集。シリーズが進むにつれ、話はこじんまりした内容になってきた。

第一話の『認知症と株券』は、毒島の元に認知症になった祖母の持っている株券の相談が持ちかけられる話。施設に入るのにお金が入用になったが、本人の同意なしに株券を処分することはできない。どんな方法が…。第二話の『眠れない男』はショートショート風。夜眠れない元刑事が病院で診察を受け、薬局で薬を処方してもらう場面。薬剤師の「毒島」の名前に気を取られ、つい話し込むと…別の可能性も…。

中山七里『ヒポクラテスの悲嘆』

３月に祥伝社から出た本。『小説ＮＯＮ』に連載されたもの。『ヒポクラテス・シリーズ』の五冊目になる。司法解剖を中心にした法医学ミステリ。浦和医科大学法医学教室の助教・栂野真琴と埼玉県警捜査一課の古手川刑事が物語の中心。

５つの話が集まっているが、今回は引きこもりになった家族をめぐるテーマが中心になっている。学校在学中から、または就職してすぐに引きこもりになり、２０年から３０年が過ぎ、親の年齢も６０歳から７０歳となっていくと将来のことが心配になってくる。収入のない子どもはどうなるのだろうか…。第一話に当たる『７０４０』は、ミイラ化した４０歳代の女性の遺体が法医学教室に運び込まれる話。２０年以上ひきこもりの状態で、餓死したように見受けられる。「事件性なし」の判断でよいのかどうかが問題。光崎教授の執刀で解剖が行われ、そこから見つかったものは…。「引きこもり」に関する世の中の情勢は今後の社会の中で更に大きな課題になってくるのだろうと考えさせられる。